# 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第９集

1999年3月

出雲市教育委員会

# 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第９集

1999年3月

出雲市教育委員会

# 序

出雲市は県内でも有数の埋蔵文化財の密集地として知られ、西谷墳墓群や今市大念寺古墳など全国的にも注目されている文化財が数多くあります。

また、近年の大規模開発に伴って、発掘調査数は格段に増加し、新たな遺跡や貴重な遺物の発見が相次いでいる一方、調査終了後には貴重な遺跡が失われていくのが現状であります。

出雲市では、平成元年から出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行し、今までに紹介できなかった発掘調査のいくつかを記録として残してまいりました。

今年度は、平成９年度に発掘調査をしました下沢での調査（上塩冶町）、平成10年度に発掘調査をしました姫原西遺跡（姫原町）を報告し、これまでの発掘調査によって明らかになりつつある当地域の特徴や地域性などについても、考察としてまとめました。

ここに、第９集として発刊の運びとなりましたが、今後もさらに埋蔵文化財保護行政を推進するための一環として刊行してまいりたいと考えています。

最後に、本書を発刊するにあたり、調査にご指導、ご協力を賜りました皆様に、心からお礼申し上げます。

平成11年３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

# 例　　言

1．本書は、これまで実施した発掘調査のうち、未報告のものの一部についてまとめたものであり、下記の２遺跡について取り扱っている。

下沢での調査について……下沢団地造成事業に伴う発掘調査

姫原西遺跡……北部第一土地区画整理事業に伴う発掘調査

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。

下沢での調査について……平成９年（1997）８月１日～10月21日

姫原西遺跡……平成10年（1998）４月23日～４月28日

3．発掘調査地の地番は、次のとおりである。

下沢での調査について……出雲市上塩冶町下沢2834－2番地ほか

姫原西遺跡……出雲市姫原町301－3

4．発掘調査体制は、次のとおりである。

下沢での調査について

調 査 主 体　出雲市教育委員会

事　務　局　後藤　政司（文化振興課課長）

調査指導者　岩橋　孝典（島根県教育委員会文化財課主事）

調査担当者　岸　　道三（文化振興課副主任主事）

糸賀　伸文（同　臨時職員）

姫原西遺跡

調 査 主 体　出雲市教育委員会

事　務　局　後藤　政司（文化振興課課長）　川上　稔（同　課長補佐）

調査指導者　守岡　正司（島根県教育委員会文化財課主事）

調査担当者　藤永　照隆（文化振興課主事）

石橋　弥生（同　臨時職員）

5．考察「後期弥生土器にみられる地域性について～出雲市内出土資料を中心に～」については、これまでの発掘調査によって得られた資料をもとにまとめたものである。

6．調査にあたっては、地元の方々から多大なる協力を賜った。また、下沢での調査にあたっては、マニワ建設㈱に多大なる協力を賜った。記して謝意を表します。

7．本書の編集は出雲市教育委員会が行ったが、執筆分担については、次のとおりである。

下沢での調査について……岸　道三

姫原西遺跡……藤永　照隆

後期弥生土器にみられる地域性について　～出雲市内出土資料を中心に～……片倉　愛美

8．遺構の略称記号は、次のとおりである。

Ｐ（ピット状遺構）　ＳＫ（土壙）　ＳＸ（性格不明遺構）

9．本書に使用した方位は磁北を示す。

10．発掘調査、遺物整理、トレース等については、次の方々の協力を得た。

下沢での調査について

発掘調査　藤原　一男　佐野　静子　藤原　博　周藤　俊也　高根　正春
米山　清司　富田　勉

整理作業等　遠藤　恭子　荒木恵理子　石川　桂子

姫原西遺跡

発掘調査　藤原　一男　周藤　俊也

整理作業等　飯國　陽子　三成　留美

# 目　　次

序

例　　言

目　　次

挿図目次

## 下沢での調査について

1．位置と環境 …… 1

2．調査に至る経緯 …… 2

3．調査の概要 …… 2

4．ま　と　め …… 4

図　　版

## 姫原西遺跡

1．遺跡の立地と概要 …… 7

2．調査の経過 …… 8

3．調査の概要 …… 9

4．ま　と　め …… 12

図　　版

## 後期弥生土器にみられる地域性について～出雲市内出土資料を中心に～

1．はじめに …… 13

2．編年試案 …… 13

3．地域間の比較 …… 14

4．土器にみられる地域性 …… 20

5．おわりに …… 22

# 挿図目次

## 下沢での調査について


第１図　調査地周辺の遺跡 …… 1
第２図　地形測量図（調査前） …… 3
第３図　ＳＸ０１実測図 …… 4
第４図　地形測量図（調査後） …… 5
第５図　トレンチ堆積土層図 …… 6


## 姫原西遺跡


第１図　姫原西遺跡周辺遺跡分布図 …… 7
第２図　調査区位置図 …… 8
第３図　遺構配置図 …… 9
第４図　ピット列（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３）実測図 …… 10
第５図　ＳＫ０１実測図 …… 11
第６図　遺物実測図 …… 12


## 後期弥生土器にみられる地域性について～出雲市内出土資料を中心に～


第１図　各部分名称 …… 13
第２図　遺跡分布図 …… 16
第３図　波状文のある土器 …… 17
第４図　上げ底の土器 …… 18
第１表　編　年　表 …… 15
第２表　口縁部の拡張グラフ …… 19
第３表　消　長　表 …… 21

出雲平野の遺跡 …… 25～26

# 下沢での調査について

# 1．位置と環境

調査地は、平成５年(1993)年３月に発行された出雲市遺跡地図によると、下沢古墳として紹介されている場所にある。しかしながら、今回発掘調査を実施した結果、確実に古墳であると断定するには不十分であり、誤解を招くおそれもあるため、本書では極力「下沢古墳」という呼称を使用しないことを断っておきたい。

調査地である下沢地区は、出雲平野の南東部、斐伊川と神戸川に挟まれた西側低丘陵とその谷間に位置している。この地域周辺には下沢のほか、鷹ノ沢や半ヶ沢など「沢」という湿地帯を示す地名が多く残っており、現在でも平地部は地盤が軟弱で、洪水などの被害を受けやすい地域となっている。

調査地は低丘陵上に位置しているが、西方に広がる平地には古墳時代の集落跡として知られる下沢遺跡や弥生時代から奈良時代にかけての遺物が検出され、複合集落遺跡として知られる角田遺跡などが存在している。古墳も周辺には数多く存在し、調査地の北方には県内の後期古墳を代表する今市大念

第１図　調査地周辺の遺跡

１.下沢古墳？　２.塚山古墳　３.今市大念寺古墳　４.樋野祐平窯跡　５.平家丸城跡　６.久徴園横穴墓
７.下沢遺跡　８.向山城跡　９.下沢会館周辺遺跡　10.藤ケ森遺跡（II地点）　11.藤ケ森遺跡（I地点）
12.善行寺遺跡　13.高西遺跡　14.伝塩冶氏館跡　15.弓原遺跡　16.神門寺付近遺跡
17.塩冶小学校付近遺跡　18.宮松遺跡　19.築山遺跡　20.塩冶判官館跡　21.上塩冶横穴墓群

寺古墳、南には上塩冶築山古墳、地蔵山古墳、半分古墳などの横穴式石室墳が存在している。また、三田谷や大井谷といった丘陵斜面には全国的にも大規模な横穴墓群として知られる上塩冶横穴墓群ほか、近年の発掘調査によって新たに発見された古墳もあり、この地域一帯が古くから墓域としての性格を有す地域であったことが窺える。

さらに、中世には平家丸城や向山城、大井谷城などの山城が築かれ、軍事的な拠点としても利用されていたようである。

以上のような歴史的環境のもと、調査地は標高36mの丘陵尾根上、出雲平野を一望できる場所に立地している。

## 2．調査に至る経緯

平成８年(1996)９月、マニワ建設㈱より、下沢団地造成予定地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地の一部には周知の遺跡である下沢古墳が存在していることから、島根県教育委員会、出雲市教育委員会、事業者であるマニワ建設㈱の３者で協議し、平成９年(1997)８月から発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査に至る手続きについては、まず、事業者であるマニワ建設㈱から埋蔵文化財発掘の届出（文化財保護法第57条の2)が平成９年(1997)７月23日付で文化庁長官宛に提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2)を同年７月25日付で文化庁長官宛に提出している。

発掘調査は、平成９年(1997)７月から準備を進め、同年８月１日から調査を開始した。調査地には笹や木の根があり、調査にかなりの日数を費したが、同年10月21日に調査を終了した。

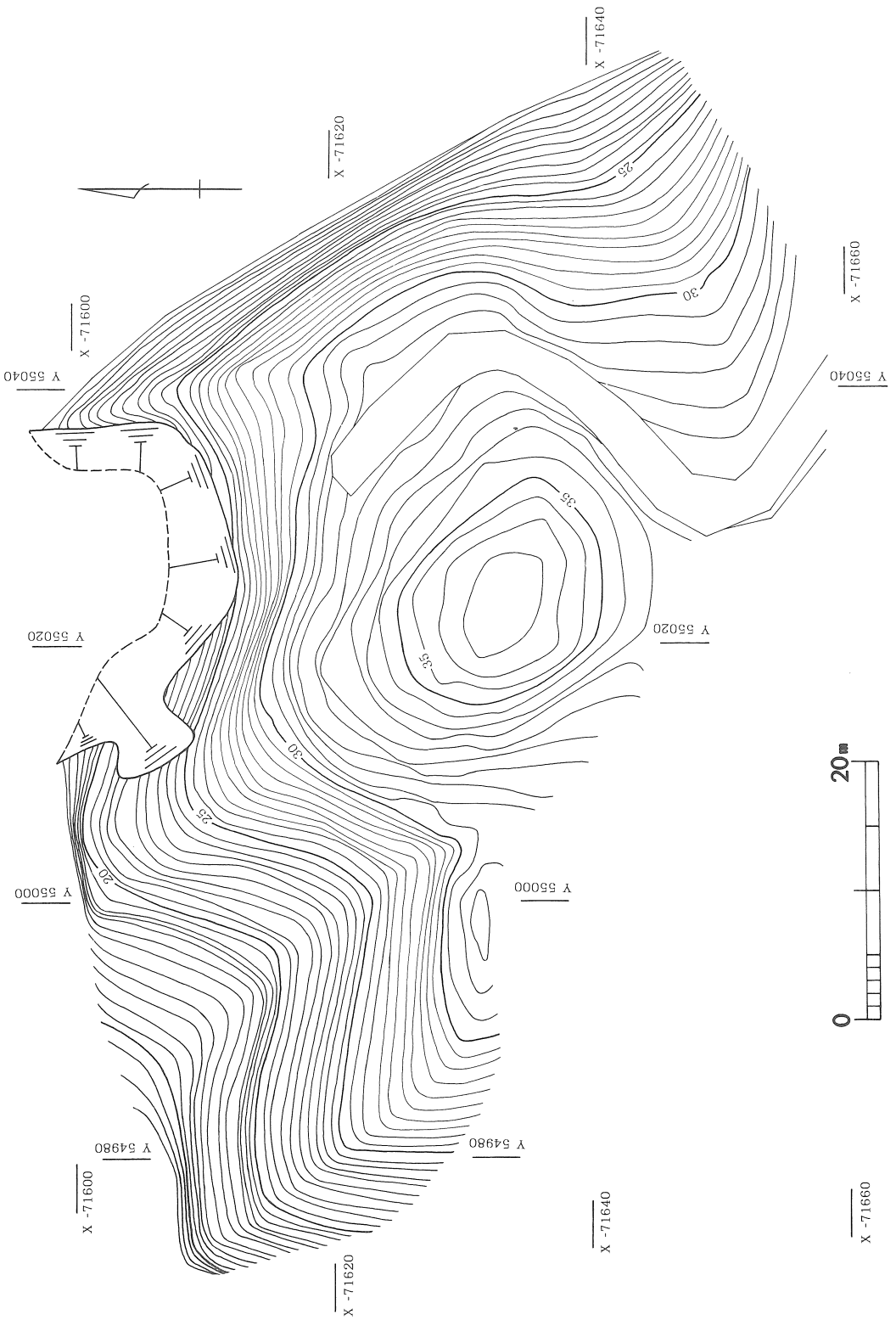
なお、調査終了後に発掘調査の概報を同年11月4日付で、島根県教育委員会宛に提出している。

## 3．調査の概要

調査は、現状での地形測量によって墳形を確認することから開始した。調査地である丘陵地の北側は、切り開かれて現在は県道が通っているため、本来はもう少し長く伸びていたものと考えられ、東側についても旧火葬場建設時に斜面が切り開かれている。しかし、このような現状にあっても、調査地は尾根上に不自然なマウンドを有しており、人工的に築かれたことは疑いのないものであった。

地形測量の結果、墳丘は北東部と南西部にかなりの削平を受けており、墳形の判断が困難なことから、最も標高の高い地点を中心として東西南北に基軸を設定した。そして、墳丘上の堆積土を一層ずつ剝ぎ、遺構及び埋葬主体を確認する作業を進めた結果、墳頂部から約2.5m東側で落ち込み状遺構(SX01)を検出した。なお、墳丘上の平坦面には他の遺構は確認できなかった。また、墳頂部付近の平坦面には拳大の河原石が若干認められているが、これは、周辺の山廻り礫層にも含まれていることから、埋葬施設や葦石として利用されていたものとは考えにくい。

次に、墳丘の構造を確認するため、墳頂部を中心として放射線状に適時トレンチを設定し、堆積土




第２図　地形測量図（調査前）

の状況を確認した。

墳頂部付近の平坦面は、表土が5～10cm程度堆積しているにすぎず、その下層は山廻り礫層（地山）に達し、墳裾部と考えられる位置でも表土、腐食系土の堆積は20～30cm程度で山廻り礫層の下位層にあたる粘質土や砂層に達する。なお、設定したトレンチの中には、地山を削り出したと考えられる切り合い関係が認められるが、削平が大きい部分では削り出し部は確認できなかった。

以下、検出した遺構（SX01）とトレンチの堆積土状況について記述する。

**ＳＸ０１**（第３図）

平坦面を有す墳頂部中心から約2.5m東側で検出した落ち込み状遺構である。幅約1.0m、長さ約2.0m、深さ約5cmを測り、ややいびつな長方形状を呈しているが、上部はかなりの削平を受けているものと考えられる。なお、検出高は標高約36.25mである。

遺構の基軸は北北東－南南西に向いており、覆土には腐食系のにぶい黄褐色土が堆積し、山廻り礫層に掘り込まれている。遺構内からの出土遺物はなく、調査全体を通しても出土遺物は皆無であったことから、築かれた時期については不明であり、この遺構を埋葬施設とするには資料として不十分である。

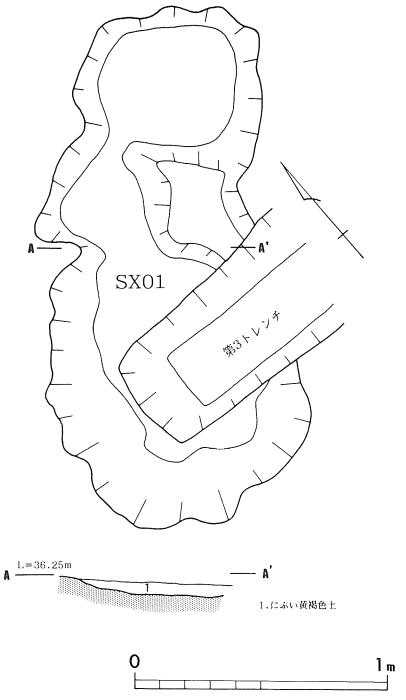
**堆積土の状況**（第５図）

墳頂部付近のやや平坦な面には、5～10cm程度の表土が堆積しており、その下層は地山である山廻り礫層に達する。この面でSX01が検出されているが、しだいに下降していく斜面での堆積は、各トレンチ間で一様ではなく、地山にかなりの段差が認められ、墳丘を削り出したと考えられる部分もあれば、全く削り出し部が認められないトレンチもある。

第６トレンチの状況では、標高34.2m～33.7m付近にかけては10～13層の地山部分にかなりの段差があり、この地点から削り出して墳丘を築いた可能性も考えられる。このような堆積は、第２・第４トレンチなどでも認められる。

一方、第７トレンチのように、斜面を明らかに後世に削られ、他の地形と極端に異なっているトレンチや第３・第５トレンチでは全く段差が認められないトレンチもあるなど、トレンチの堆積土の状況からは、全体を削り出して墳丘を築いたかについては判断し難い。

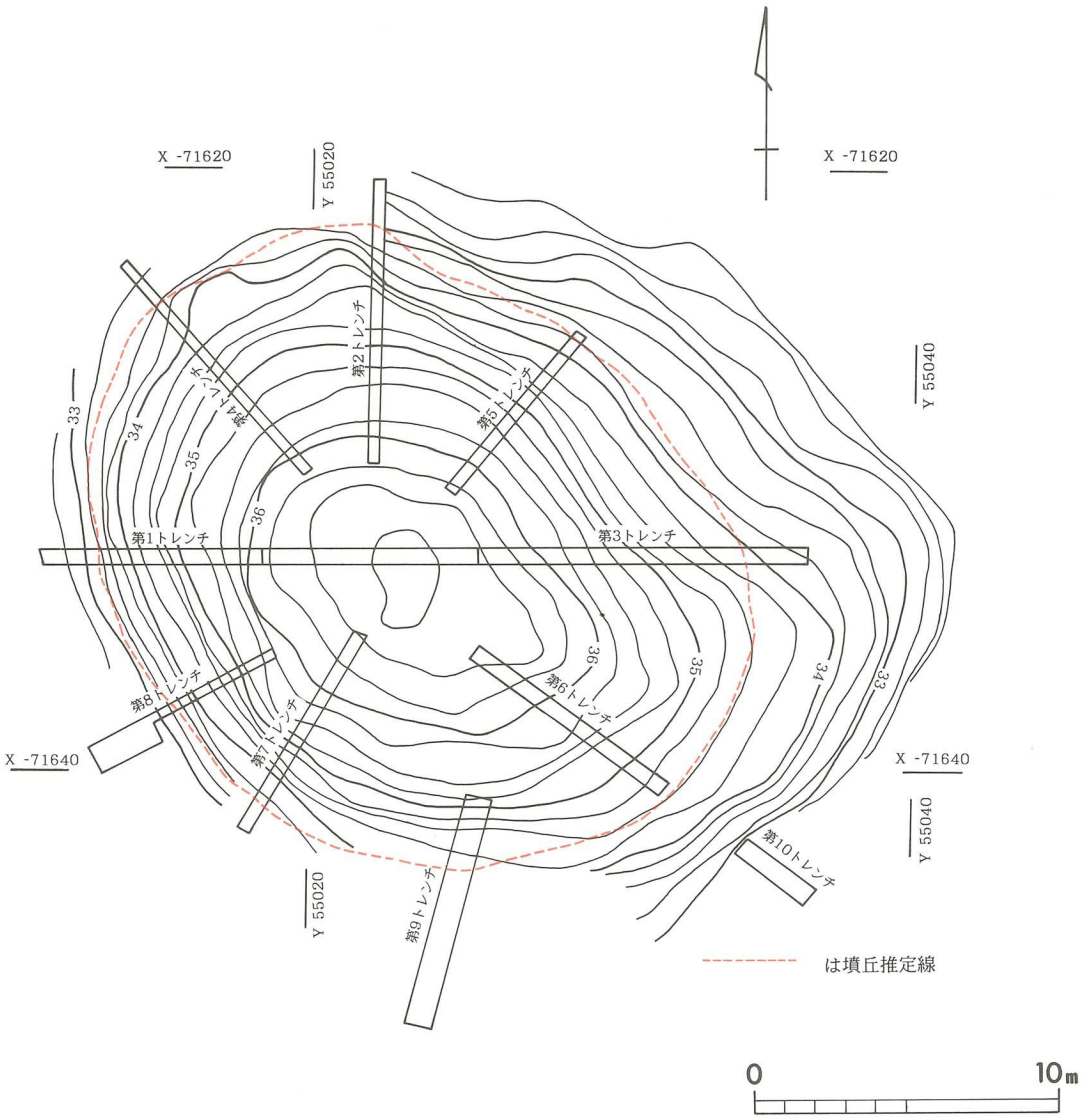
なお、墳丘下の平坦面に第８～第10トレンチを設定して堆積土の状況を確認したが、表土や腐食系の土が40～50cmとやや厚く堆積しているものの、その下層は地山に達し、周溝と考えられるような落込みは認められなかった。




第3図　SX01実測図

## 4．ま　と　め

今回の調査では、墳丘がかなりの削平を受けていると考えられることから、規模や構造について判断することは難しい状況であった。また、調査全体を通して遺物が皆無で




第４図　地形測量図（調査後）

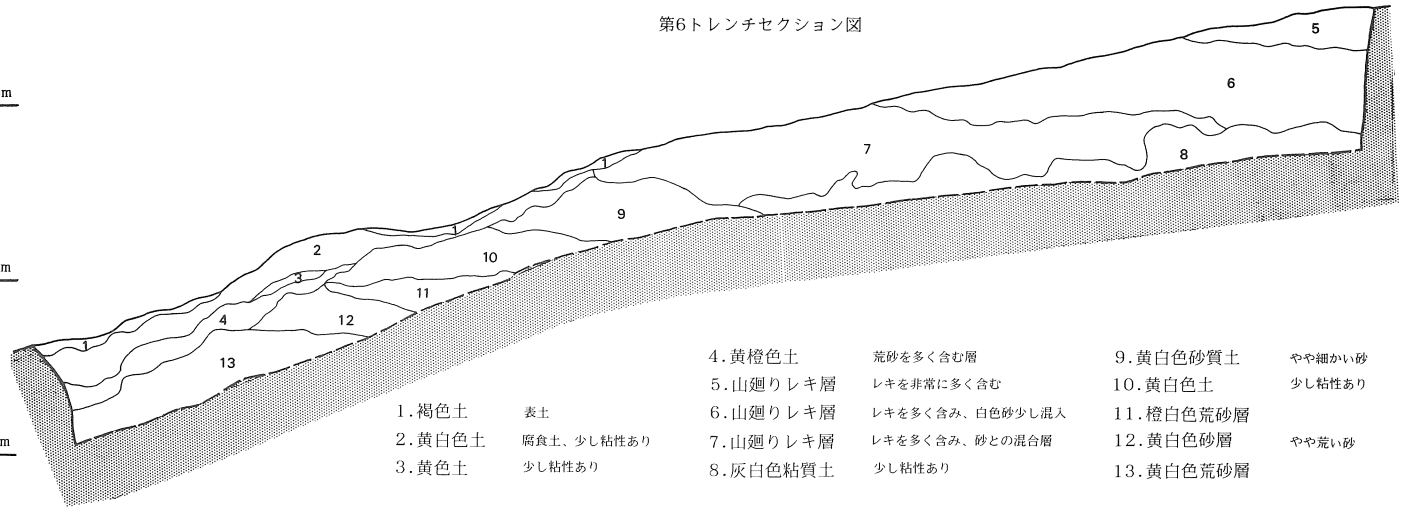
あったことは、調査地が、古墳として築造されたかどうかについても疑問を生じさせる。

あえて、古墳として築かれたとすれば、トレンチ堆積土の状況や遺構の検出状況などから、地山削り出しによって築かれ、円墳であれば最大径約18m、高さ約2.25mを測り、墳頂部に埋葬施設を有していたと考えられる。また、外表敷設としての葦石や埴輪などは認められず、墳丘下のトレンチを確認する限り、周溝も認められない。

築造時期については、出土遺物がないため判断し難いが、地山削り出しによって築かれ、横穴式石室を有しないことなどから古墳時代前期～中期頃の可能性が強い。出雲平野には数多くの古墳が存在しているが、前期末の古墳としては山地古墳（神西沖町）、大寺古墳（東林木町）、中期古墳としては北光寺古墳（東神西町）、西谷15・16号墳などが確認されているにすぎず、この古墳が前期～中期古墳の可能性があることは、貴重な発見であると言える。

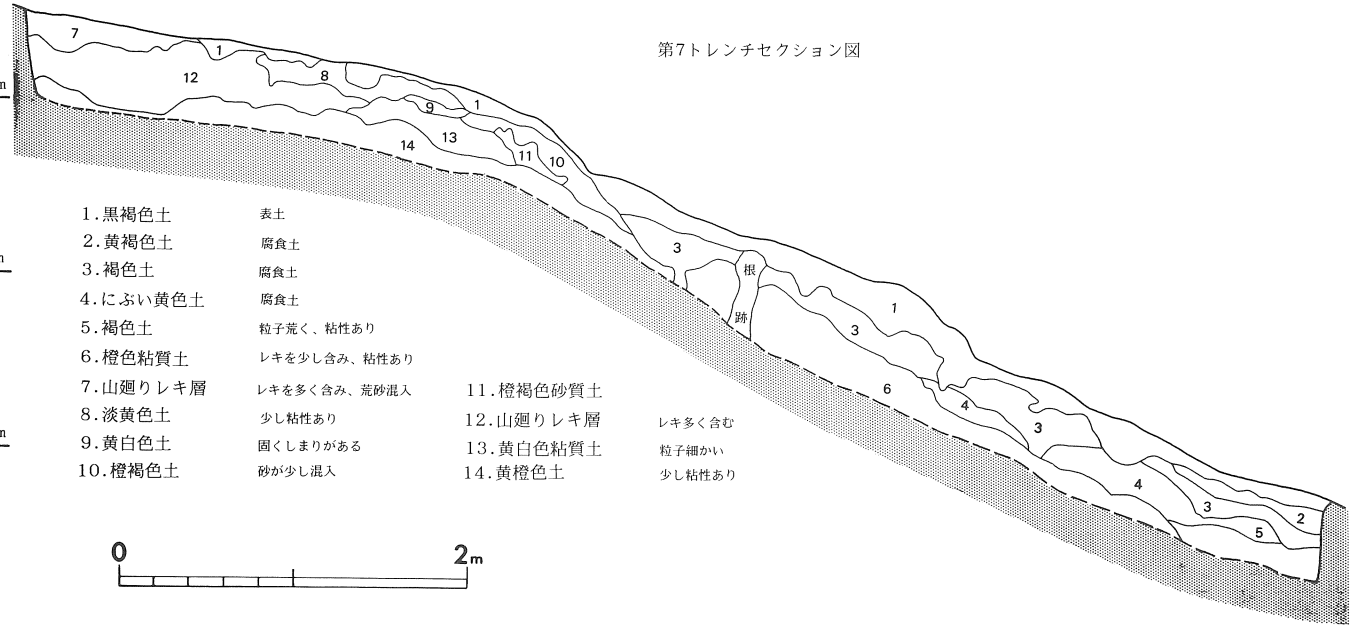
しかしながら、残存状況が悪く、確実な埋葬主体や遺物が発見されなかったため、古墳であると断定できなかったことは惜しまれる。

第6トレンチセクション図




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1.褐色土 | 表土 | 4.黄橙色土 | 荒砂を多く含む層 | 9.黄白色砂質土 | やや細かい砂 |
| 2.黄白色土 | 腐食土、少し粘性あり | 5.山廻りレキ層 | レキを非常に多く含む | 10.黄白色土 | 少し粘性あり |
| 3.黄色土 | 少し粘性あり | 6.山廻りレキ層 | レキを多く含み、白色砂少し混入 | 11.橙白色荒砂層 | |
| | | 7.山廻りレキ層 | レキを多く含み、砂との混合層 | 12.黄白色砂層 | やや荒い砂 |
| | | 8.灰白色粘質土 | 少し粘性あり | 13.黄白色荒砂層 | |

第7トレンチセクション図




| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1.黒褐色土 | 表土 | 7.山廻りレキ層 | レキを多く含み、荒砂混入 | 11.橙褐色砂質土 | |
| 2.黄褐色土 | 腐食土 | 8.淡黄色土 | 少し粘性あり | 12.山廻りレキ層 | レキ多く含む |
| 3.褐色土 | 腐食土 | 9.黄白色土 | 固くしまりがある | 13.黄白色粘質土 | 粒子細かい |
| 4.にぶい黄色土 | 腐食土 | 10.橙褐色土 | 砂が少し混入 | 14.黄橙色土 | 少し粘性あり |
| 5.褐色土 | 粒子荒く、粘性あり | | | | |
| 6.橙色粘質土 | レキを少し含み、粘性あり | | | | |

第5図　トレンチ堆積土層図

# 図　　版

調査前の状況

墳丘上から出雲平野を望む

ＳＸ０１完掘状況

図版 2

第 6 トレンチ土層断面

第 7 トレンチ土層断面

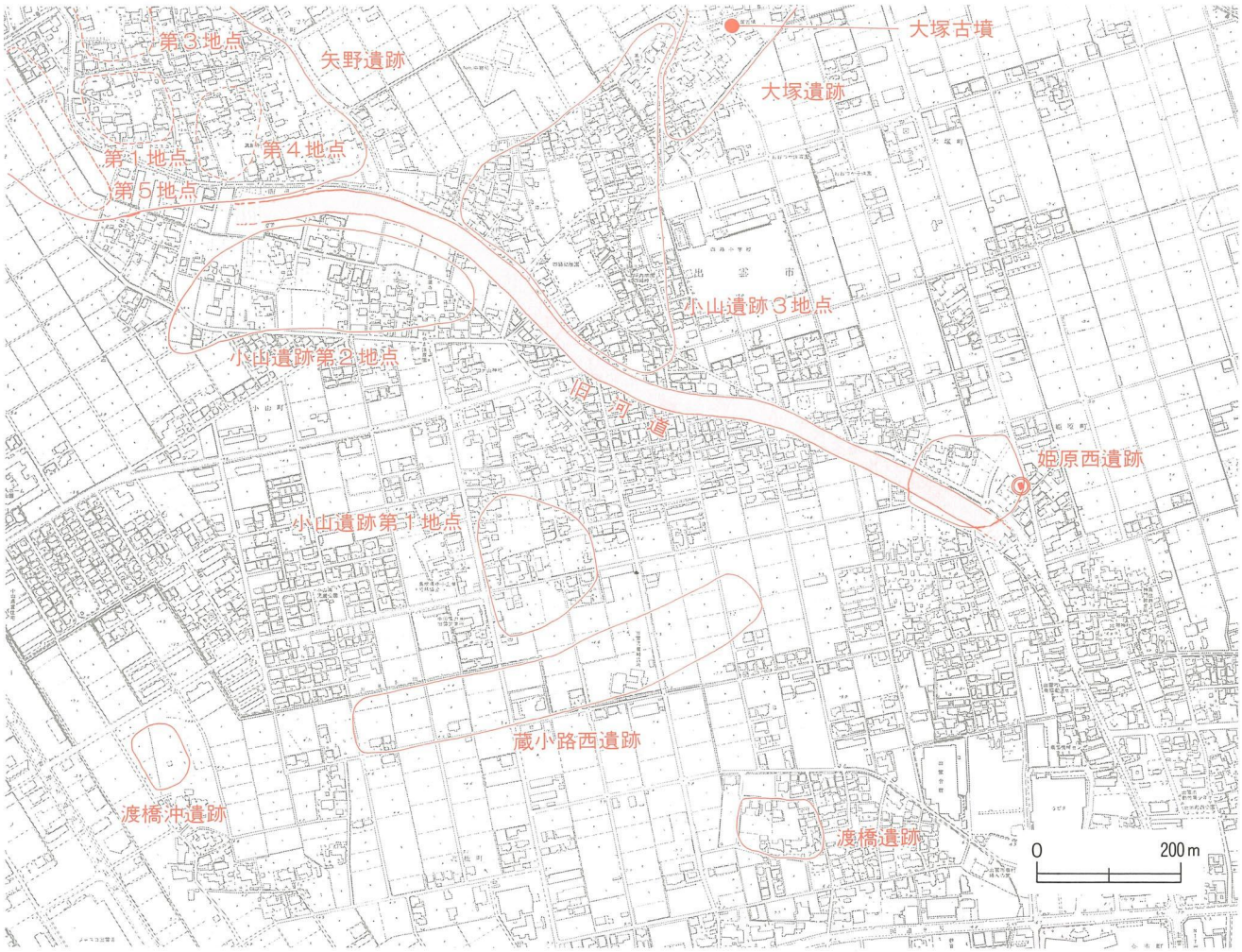
完掘状況

# 姫原西遺跡

# 1．遺跡の立地と概要

姫原西遺跡は、近年の国道９号バイパス建設に伴う発掘調査（島根県教委）で発見された遺跡である。市街地より約500m北、出雲平野のほぼ中央部に形成された旧河川（神戸川水系？）の旧自然堤防南東縁辺部に位置している。北西には出雲平野における弥生時代の拠点集落に位置づけられている四絡遺跡群（矢野遺跡、小山遺跡、大塚遺跡の総称）が存在し、西には中世屋敷跡などの確認される蔵小路西遺跡が存在する。また、東方ではこれまでにも近隣で試掘調査等が実施されているが、現在のところ遺跡は確認されていない。

当遺跡で近年すでに調査が実施された区域の状況では、遺跡の西側部分は自然河道部分で、弥生時代終末の橋状施設のほか、杭列、貝塚などが確認され、東側部分では古墳時代初頭の掘立柱建物跡や中世木棺墓などが確認されている。今回発掘調査を行なったのは遺跡のほぼ南東端にあたる部分である。



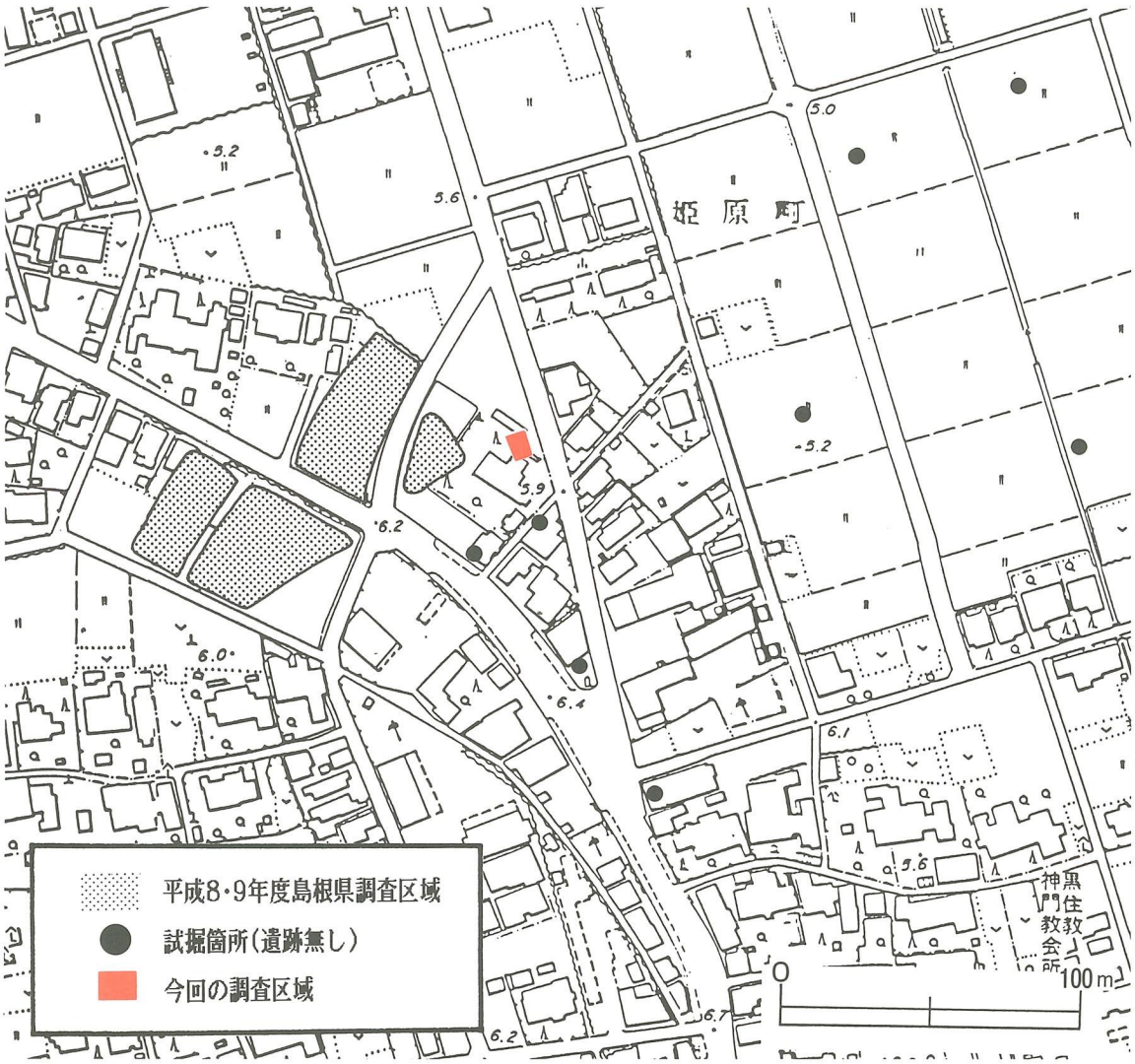

第１図　姫原西遺跡周辺遺跡分布図

## 2．調査の経過

平成10年２月、出雲市北部区画整理課より北部第一土地区画整理事業予定地（出雲市駅前矢尾線道路拡張工事部分）における埋蔵文化財確認調査の依頼を受けた。付近には姫原西遺跡が存在することから、同年３月より遺跡の有無の試掘調査を実施した。

試掘調査は、事業予定地内に５ヵ所のトレンチを設定し、徐々に掘削しながら遺構・遺物の有無を確認した。その結果、試掘調査では遺物は全く確認されなかったものの、北側１ヵ所のトレンチにおいてピットなどの遺構が確認されたため、北部区画整理課と協議し、発掘調査を実施することで合意した。

発掘調査は、平成10年４月23日から開始し、同年４月28日までの期間により、出雲市教育委員会がこれを行なった。調査後、事業地内の遺跡の取り扱いについて島根県教育委員会と協議を行なった結果、これを記録保存に留めることとなり、その後工事着工となった。




第２図　調査区位置図

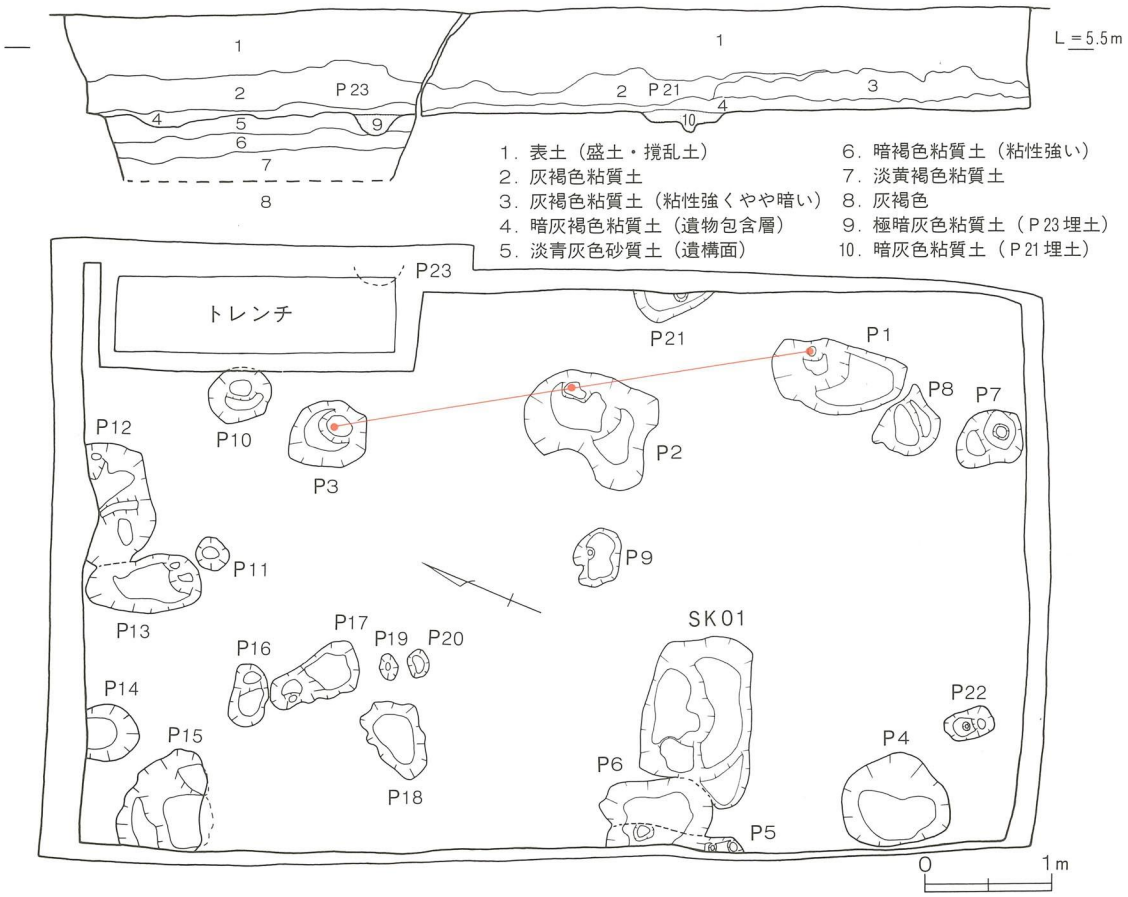
# 3．調査の概要

今回の発掘調査は道路拡幅予定地において遺跡の確認された部分、事業予定地最北の約40㎡（東西約５ｍ×南北約８ｍ）について実施した。

層序は、基本的に上層から、表土（盛土・撹乱土）・灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土・淡青灰色砂質土・暗褐色粘質土・淡黄褐色粘質土・灰褐色砂質土の順に堆積している。暗灰褐色粘質土より遺物が少量確認されており、その下層の淡青灰色砂質土上面が遺構面となっている。これより下層からは遺構・遺物共に全く確認されなかった。

地表から遺構面までは約80㎝、標高約５ｍである。遺物包含層は厚さわずか10㎝程度しか残存しておらず、遺物も土器小片が少量確認できる程度であった。遺物の量が極端に少ないことから、あるいは本来の包含層は一度削平されている可能性もある。

遺物としては、小片のため断定はできないが、中世頃の青磁、弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器かと考えられるものが確認された。遺構としてはピット列１、土壙１、その他ピット20が確認された。




第３図　遺構配置図

ピット列（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３）

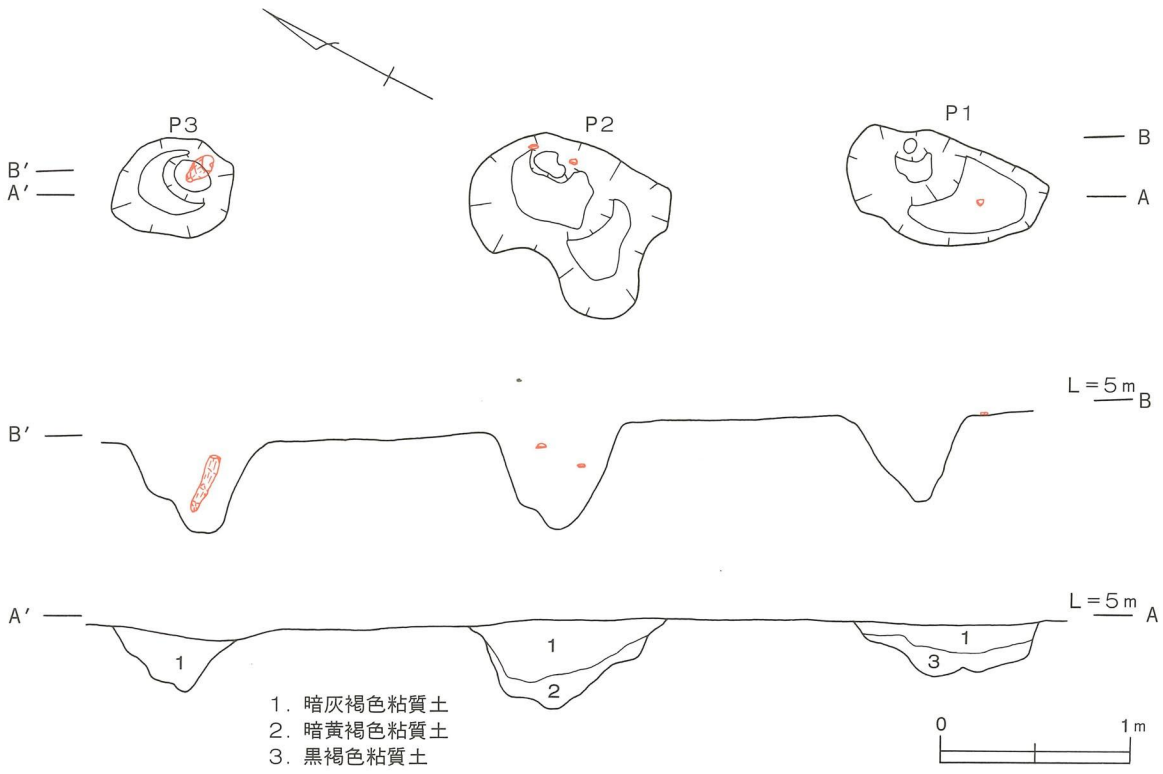
調査区の東端で３基のピットが並んだ状態で検出されており、掘立柱建物跡の可能性もある。最北のピット（Ｐ３）では柱根も残存していた。

ピットの平面形はやや不整形で統一していないが、いずれも柱を建てたと推定される箇所が部分的に深くなっている。また、深さはいずれも最も深い部分で50㎝前後である。また、ピット間の距離は最も深い部分で約1.9ｍの等間隔で並ぶ。

掘立柱建物跡であるとすれば南北２間以上である。調査区が狭いためこれ以上のことは判断し難いが、あるいはＰ１２・４・５などに続くものかもしれない。

遺物としては、Ｐ１上面より土師質の土器片１、Ｐ２埋土中より土師質の土器片１、磁器片１が確認された。Ｐ２の磁器（図版３－２）は中国産青磁の破片かと考えられるものである。図化はできなかったが、内面には印判による文様がわずかに確認できる。土師質の土器については、いずれも弥生後期～古墳初頭の土器であろうか。低脚坏等の脚部かと考えられるもの（第６図－１）、壺等の二重口縁の一部かと考えられるもの（第６図－２）がある。

青磁について考えられる時期は、１４世紀～１５世紀頃のものと推定される。遺構の時期はこの青磁の時期に近いものであろう。



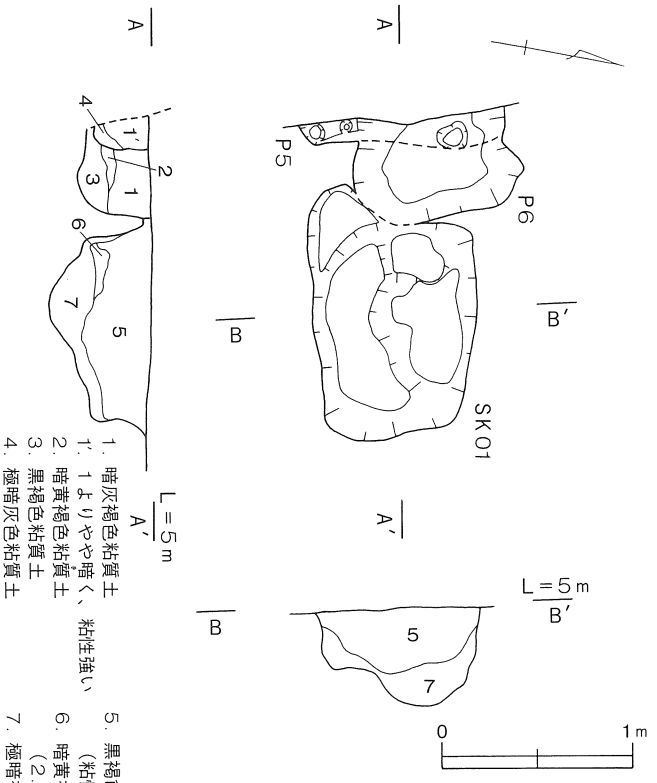

第４図　ピット例（Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３）実測図

## ＳＫ０１

SK01は、幅約84cm、長さ110cm、一部Ｐ６によって切られているが、やや歪んだ隅丸方形の平面形を呈するものである。深さは深い所で約52cmで、底の部分は北側約半分が南側に比べ20cm程度一段低くなっている。

この土壙の性格等は不明であるが、土壙内埋土の下層に細かい木屑が混入しており、本来は木材を使用する構造であった可能性がある。

遺物は埋土中より弥生土器壷等の底部と思われる細片を１片確認しているが、（第６図－３）、遺構の時期を判断するにはやや不十分な資料である。




第５図　ＳＫ０１実測図

## その他のピット（Ｐ４～Ｐ23）

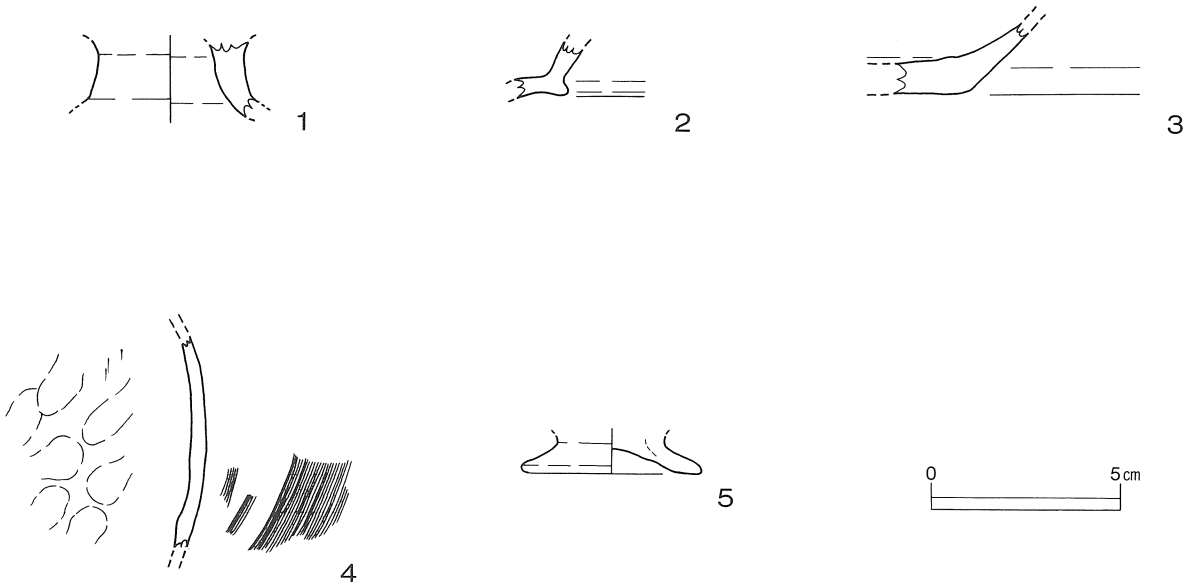
その他性格不明のピットが合計20基確認されている。平面形は不整形なものが多く、深さにもばらつきがある。

深さ10～20cm程度の浅いものはＰ９・11・14・16～23、深さ30～40cmのものはＰ4～8・10・13、深さ50～60cmのものはＰ12・15である。また、Ｐ６はＰ５に切られており、Ｐ12はＰ13によって切られている。

遺物はＰ４とＰ10において土師質の土器片が確認されている。Ｐ10の土器（第６図－４）については、弥生後期～古墳時代初頭頃の甕体部片かと推定される。外面にハケメが施され、内面にナデ、オサエ及びケズリが施されている。底部付近の破片であろうか。

## 包含層遺物

包含層遺物には形状の判別できるものはほとんど無いが、土師質の土器細片が数点出土している。比較的形の判別できる資料としては、遺構面直上から弥生時代終末～古墳時代初頭頃の低脚坏の脚部かと推定されるもの（第６図－５）が１点出土している。




1．P2埋土中　　2．P1上面　　3．SK01埋土中　　4．P10埋土中　　5．包含層

第6図　遺物実測図

## 4．ま　と　め

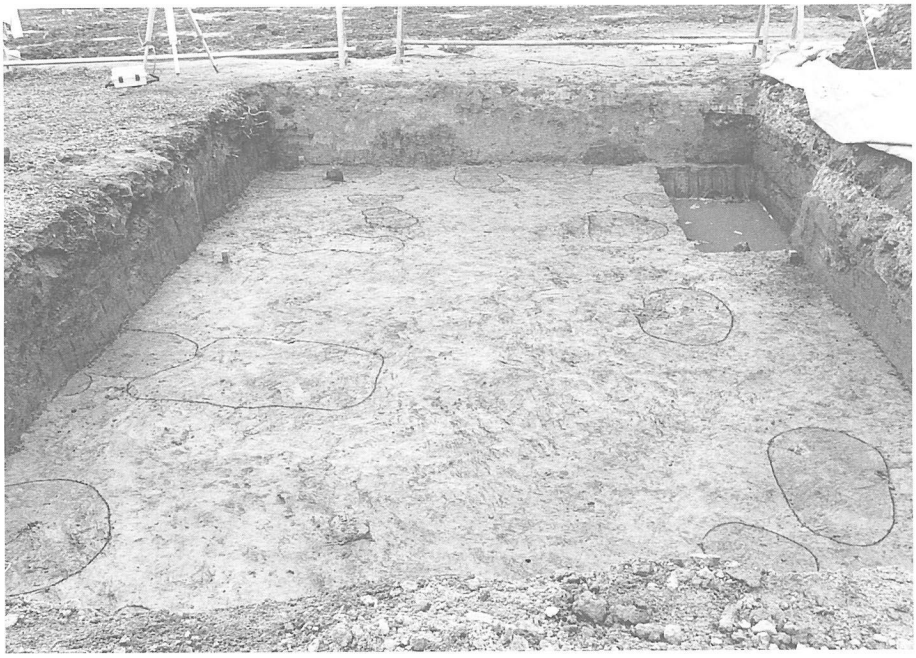
1週間にも満たない短期調査となった今回の発掘調査であるが、遺構としてピット列（P1・P2・P3）や土壙（SK01）、多数のその他ピット（P4～P23）を確認しており、姫原西遺跡の広がりを検討する上での貴重な資料を得ることができた。なお、これまでの試掘調査等の結果から、今回調査地より東方・南方にはそれほど広く遺跡は広がっていないと推定される。

遺物については極めて少量ではあるが、弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器及び中世の土器が確認されている。少ないながらも土器片の割合から見ると弥生時代後期～古墳時代初頭頃の土器かと思われる資料が多く、遺構の時期も多くはその頃のものである可能性が高い。しかしながら、各遺構がどちらかの時期にあてはまるものかを判断することは、今回の調査面積と遺物の量では極めて困難である。

報告した遺物の他にも時期不明の土器は若干存在するが、須恵器片等は1片も混ざっておらず、現状では古墳時代中期から古代にかけての大部分の時期は空白となっている。このような状況は当遺跡における他の調査においても類似した状況にあるようで、当地の古環境を考える上でも興味深い事実である。

今後、近隣の四絡遺跡群や蔵小路西遺跡との関連を踏まえた集落の動き、古環境の変化などを検討し、出雲平野の中心部である四絡地区全体の動向を追求する必要があろう。

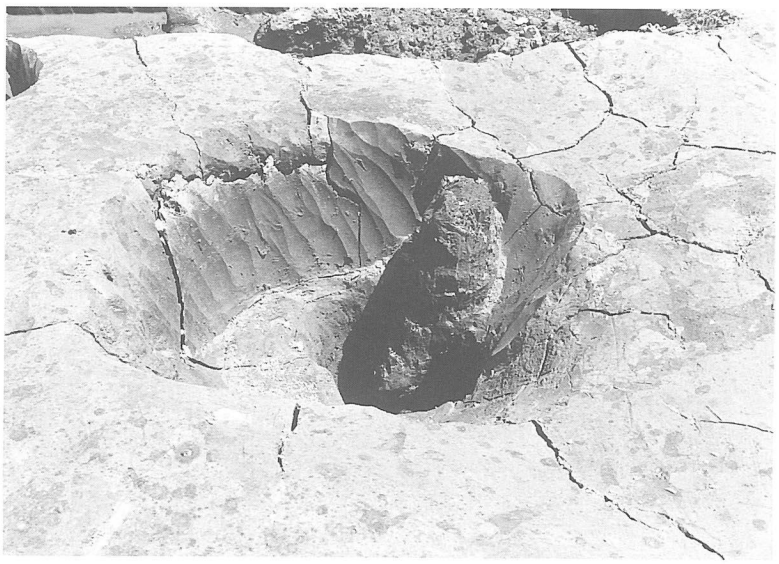
# 図　　版



図版１－１　遺構検出状況

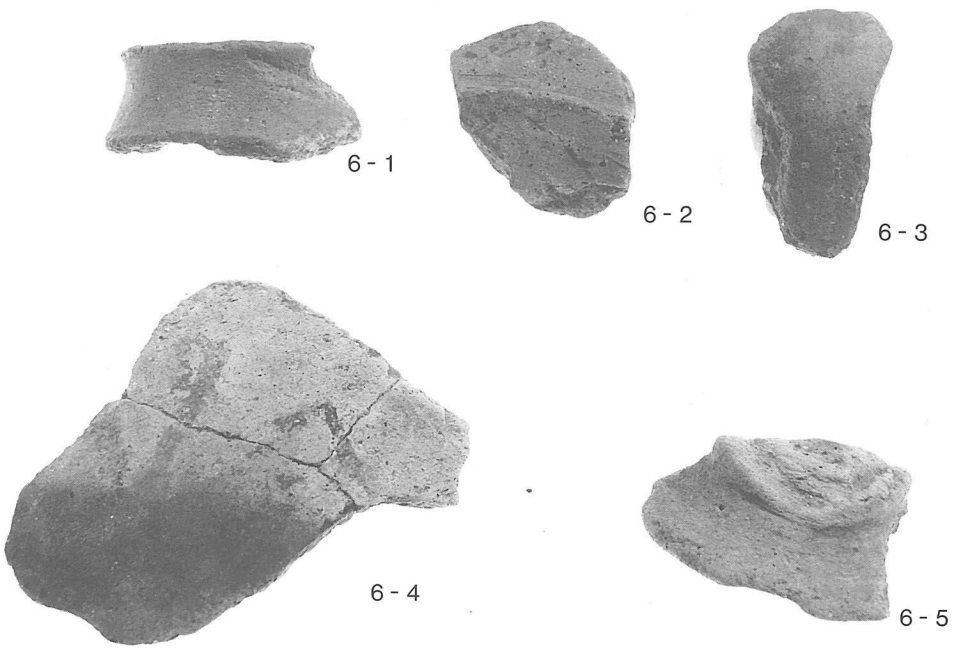
図版１－２　完掘状況

図版 2



図版２－１　Ｐ３柱根検出状況

図版２－２　ＳＫ０１（写真上）




図版 3 － 1　出土遺物①

図版 3 － 2
出土遺物②
（P 2 出土青磁片）

# 後期弥生土器に見られる地域性について

## ～出雲市内出土土器を中心に～

# 後期弥生土器に見られる地域性について

～出雲市内出土土器を中心に～

## はじめに

近年、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査は頻繁に行われ、多くの貴重な遺跡、遺物が発見されている。出雲市も例外ではなく、白枝荒神遺跡、下古志遺跡などの調査により、出雲平野の古代の様相が少しずつ解明されつつある。

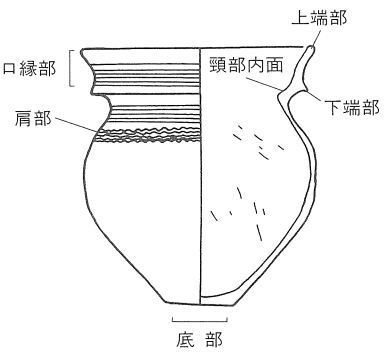
山陰には弥生時代後期頃からいわゆる「山陰系土器」といわれる独特の形をした土器が作られ、山陰の弥生時代がら古墳時代にかけての時代区分を行うにあたっての、重要な指標として研究が進められているが、形式編年も統一されていない状況にある。これは出雲地方という狭い地域のなかでも場所によって形が微妙に違う、地域性があるのではないかという指摘がなされているものの、現在のところ、地域性について触れられた研究は少ない。

そこで、今回は出雲市で出土している多くの後期山陰系土器の中でも、特に数多く出土している甕形土器を取り上げ、斐伊川流域の他の地域の土器と比較することによって、地域性の有無を確認したい。

ただし、墳墓への供献土器は他地域で作られて運ばれた可能性もあるため、今回は西谷墳墓群などの埋葬施設に伴う資料は対象とはしない。

## １．編年試案

出雲市内の遺跡で出土している甕形土器を用いて、簡単な編年を行う。ただし、大枠については従来の研究成果に基づく。また、文中で用いる部分名称については図１の通りである。




第１図　各部分名称

（１　　期）口縁部は短く厚みがあり、端部はほとんど下には延びない。外面に多少幅のある凹線が施されている。器壁も厚く口縁部内部はミガキで仕上げられることが多く、まれにナデ仕上げである。最大径は全体のほぼ１/２に位置する。底部については残存していることが少ないためはっきりしないが、おそらく平底であったろうと思われる。

（２－１期）口縁部は１期より薄く仕上げられ、内面はナデで仕上げられることが多い。外面には１期よりも細く、細かい平行沈線が施される。口縁端部は多少下へ延びる傾向にある。器壁は１期よりも薄い。最大径は全体のほぼ１/２、またはそれより上にくる。底部は平底、または平底のなごりがある程度である。

（２－２期）器形は２－１期と大きな変化はないが、口縁部外面の平行沈線が１部ナデ消される傾向がみられる。これは口縁部の内面をナデで仕上げる際に外面部分も消されてしまうものと思われる。

器形に変化は無いものの、口縁部外面に平行沈線を施文する時期から、無文のナデ仕上げに移行す

る過渡期であると考えるため、あえて２期を細分するものである。

（３　　期）口縁部外面に文様が施されなくなり、内外面とも完全にナデ仕上げである。口縁上端部が鋭くなる。下端部は下に延びていたものが、次第に短くなる。最大径は全体の１/２より上にくるようになり、やや倒卵形に近づく。底部は先端が尖り気味であるが、完全な丸底である。

（４　　期）口縁上端部が丸く仕上げられる。下端部は横方向に隆起するようになる（側隆）。器形は完全な倒卵形になり、底部は先の細い丸底である。

（５　　期）口縁上端部は平らな面を持つようになり、下端部の側隆は鋭くなる。最大径が下がって全体のほぼ１/２あたりに位置し、尖り気味だった底部が丸みを帯びてくる。

（６　　期）口縁上端部はさらに広い面を持ち、横方向へ延びる傾向にある。最大径は全体のほぼ１/２に位置し、底部はほぼ完全な丸底になる。

以上の編年案を示したものが表１である。これをもとに出雲平野出土の遺物とその他の地域の遺物の比較検討を行いたい。

## ２．地域間の比較

地域性を比較するため、これまで違いがあるではないかといわれてきた出雲平野（斐伊川下流域）、斐伊川上流域、松江（意宇平野）の３地域に区分し、それぞれの資料を取り上げる。資料の出土遺跡は以下の通りである。

なお、中流域にあたる木次・三刀屋町付近では殆ど資料が確認できなかったため、今回は取り上げず、加茂町神原正面北遺跡出土遺物を参考資料として用いたい。

- 出雲平野（斐伊川下流域）　天神遺跡　古志本郷遺跡　下古志遺跡　白枝荒神遺跡　山持川川岸遺跡
- 斐伊川上流域　日焼田遺跡　追谷遺跡　渋谷遺跡　下大仙子遺跡　角田遺跡　芝原遺跡　須坂４号墳（古墳の下から住居跡がでており、ここで取り上げる土器は古墳ではなく住居跡に伴うものと思われる。）
- 松江（意宇平野）　平所遺跡　タテチョウ遺跡

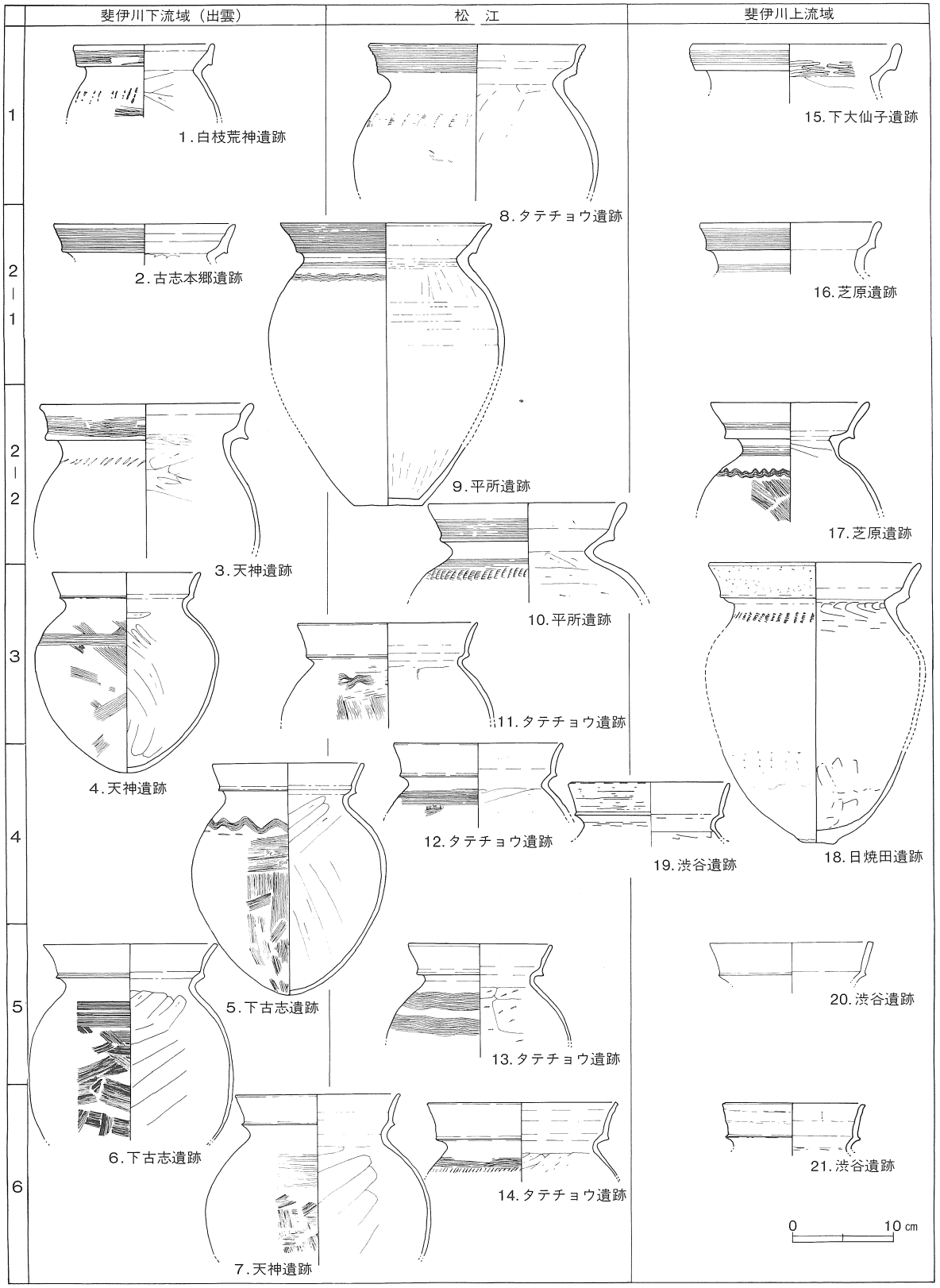
上流域の遺跡として挙げた日焼田、追谷両遺跡出土の土器は位置的にいわゆる山間部の土器として扱われることが多い。山間部の土器の特徴としてよく挙げられるのが、

- 胎土が粗い。（砂粒を多く含む）
- 器壁が厚く、全体的に粗い作りとなっている。

の２点が主にいわれている。

この特徴は、いわば見た目に頼ったものであり、見る人によって個人差が現れやすいものである。また、松江と出雲という近距離の地域間の出土土器についても、「地域によって違いがあるのではないか」といわれてはいるものの、どの部分に明確な違いがあるのか、ということははっきりとは指摘されていない。

そこで、上記の３地域間での相違点が本当に存在するのかどうかを確かめるための比較点を、

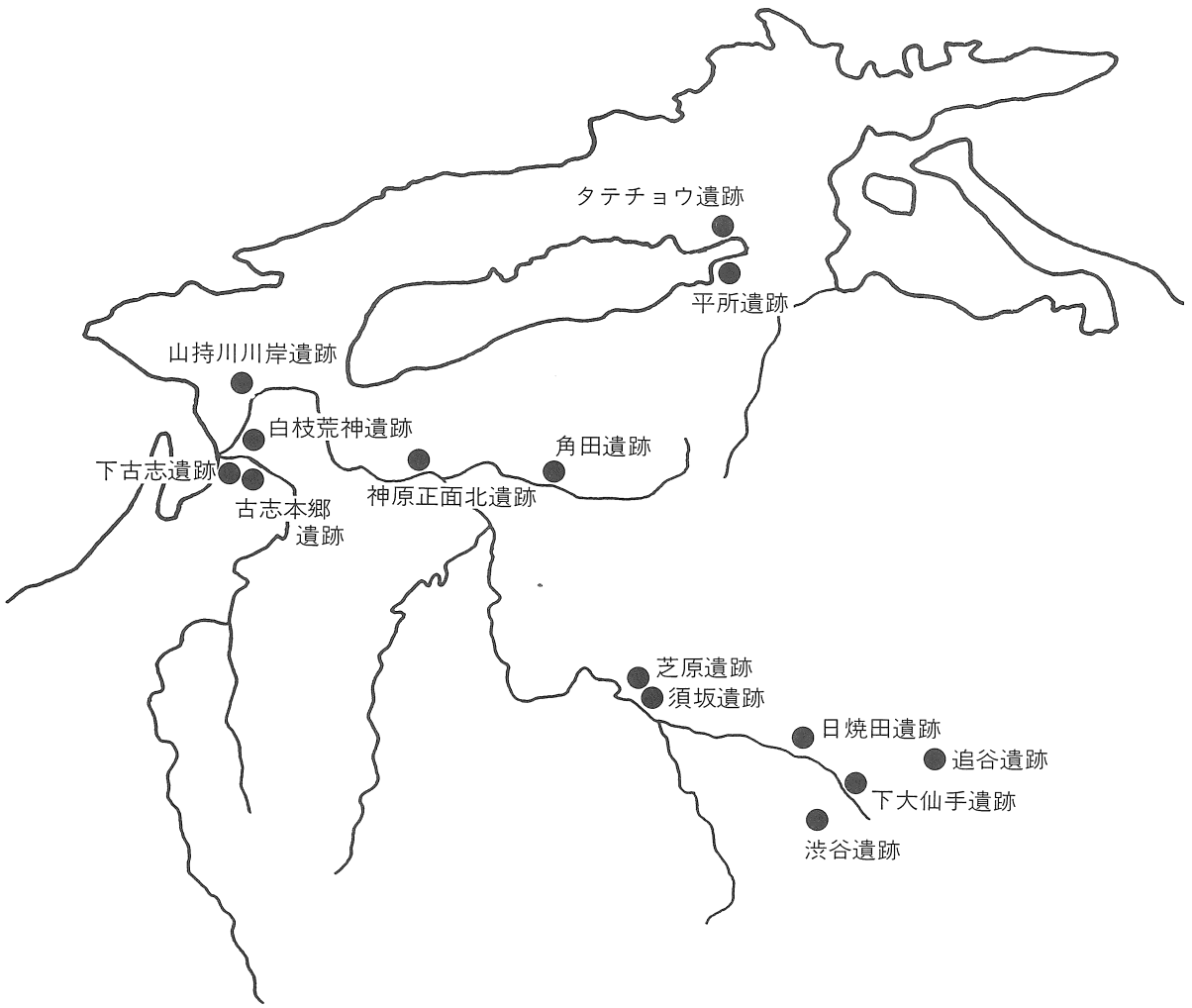

斐伊川下流域（出雲）
松　江
斐伊川上流域
1
2－1
2－2
3
4
5
6
1.白枝荒神遺跡
2.古志本郷遺跡
3.天神遺跡
4.天神遺跡
5.下古志遺跡
6.下古志遺跡
7.天神遺跡
8.タテチョウ遺跡
9.平所遺跡
10.平所遺跡
11.タテチョウ遺跡
12.タテチョウ遺跡
13.タテチョウ遺跡
14.タテチョウ遺跡
15.下大仙子遺跡
16.芝原遺跡
17.芝原遺跡
18.日焼田遺跡
19.渋谷遺跡
20.渋谷遺跡
21.渋谷遺跡
0
10 cm

第１表　編年表

● 波状文の採用時期
● 底部の上げ底の有無
● 口縁部の拡張の有無
● 口縁下端部の形式の違い
の4点に絞りたい。

まず、波状文の採用時期について第3図をみると、斐伊川上流域では2－1期から口縁部外面に波状文が施されている。また、早くから取り入れられているだけではなく、角田遺跡17／59（29％）、日焼田遺跡10／24（42％）、下大仙子遺跡3／15（20％）、追谷遺跡1／6（17％）、芝原遺跡1／10（10％）、須坂4号墳3／10（30％）と全体的な出土数が少ないにも関わらず、必ず波状文が施文された土器が出土しており、全体の中にしめる波状文の割合が大きいといえる。

この上に肩部に施文されている分も含めると、その数はさらに増える。須坂4号墳（弥生住居跡）出土遺物のなかには、鼓形器台の外面にも波状文が施文されているものがあり、器種を問わず波状文が採用されていることが分かる。



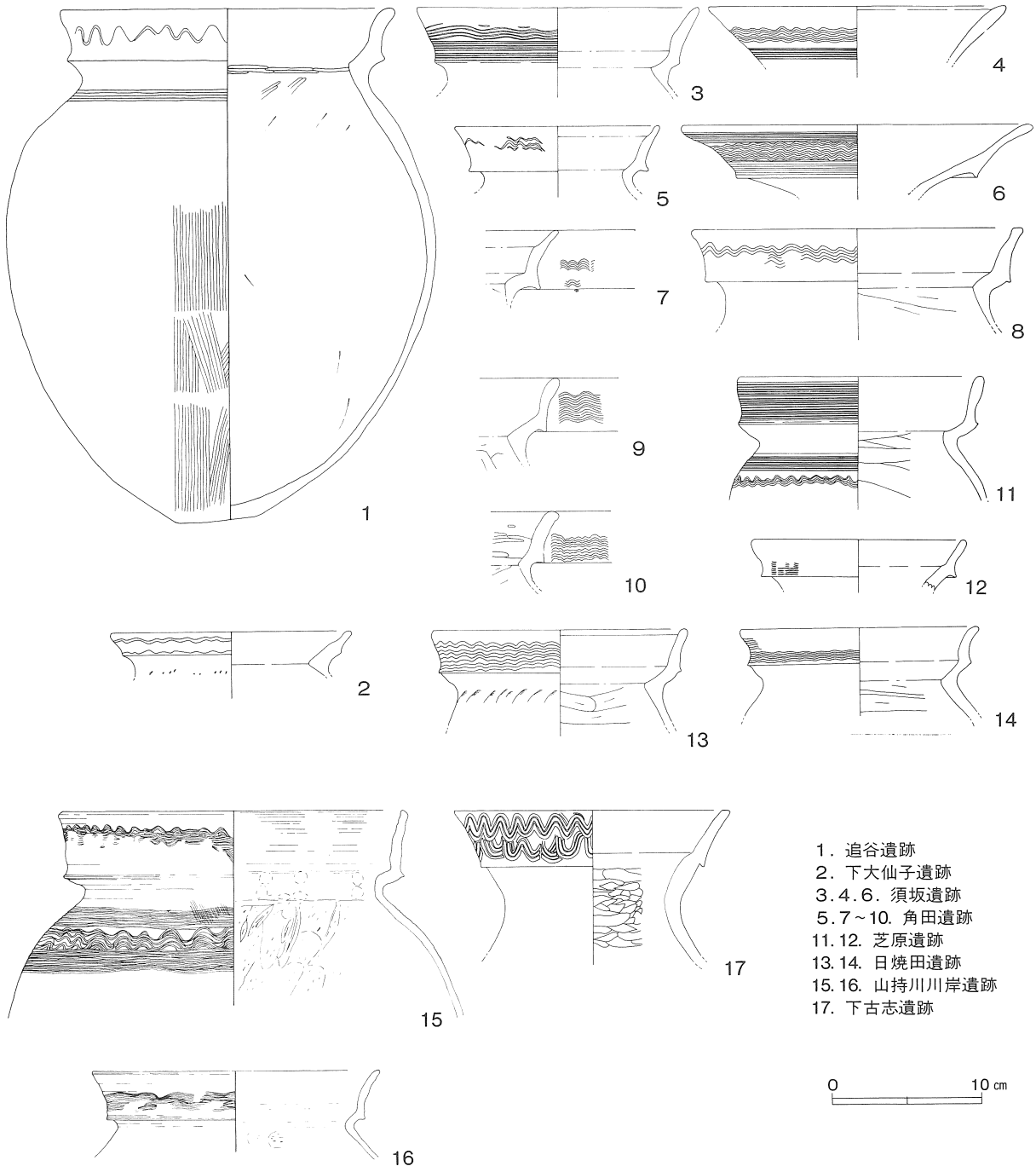

第2図　遺跡分布図

一方、出雲平野（斐伊川下流域）や松江では、波状文は3期以降肩部に施文されるものが若干見られるものの、上流域にように口縁部外面に波状文が施されているものは、山持川川岸遺跡で出土して

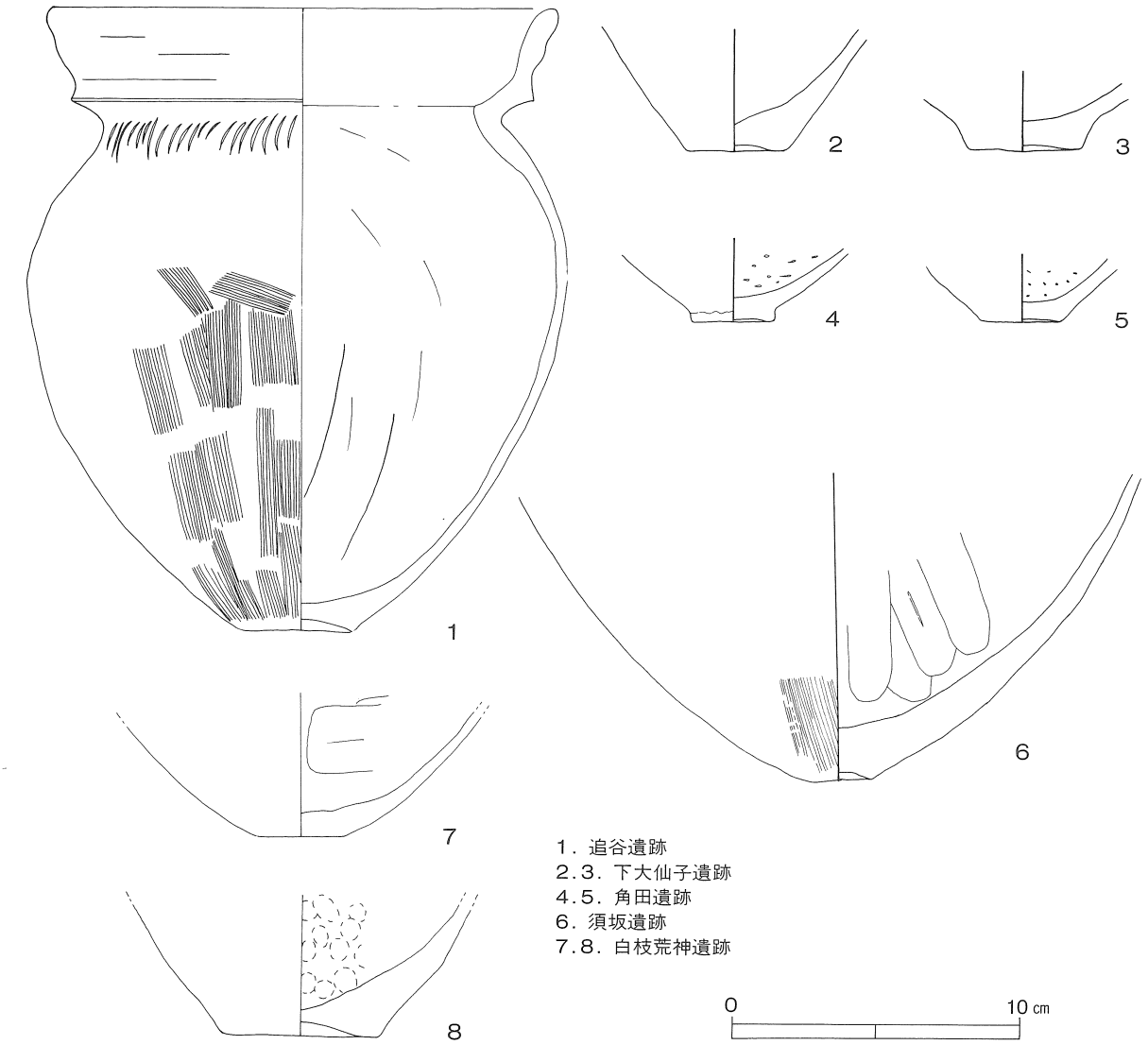
いる２点と、タテチョウ遺跡出土の壺にみられる程度で、上流域程多用されていない。

このほかの遺跡でも、同時期の土器は多数出土しているが、波状文が施文されているものは皆無であり、このことから考えても、上流域で波状文がいかに多用されていたかが窺える。

次に、底部の状態についてであるが、第４図にいくつか図示しているが、上流域では３期近くになっ




第３図　波状文のある土器




第4図　上げ底の土器

ても上げ底状に整形しているものがみられる。出雲（下流域）や松江では、3期になると平らな部分がなくなり、より丸底に近づくが、上流域では3期に入っても平底が残っているうえに上げ底状のものが多い。

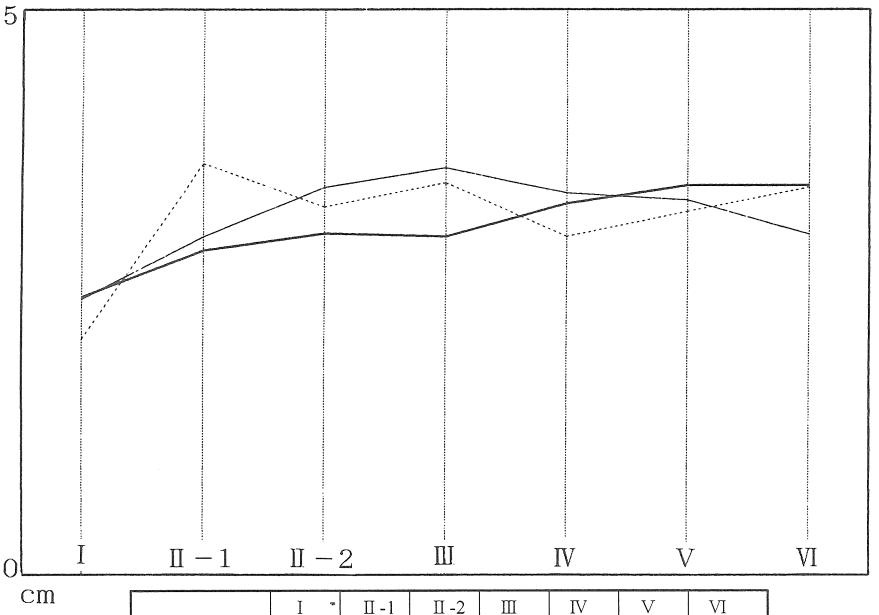
出雲（下流域）でも白枝荒神遺跡出土の底部などは上げ底状にはっきりと意図的に整形されているものが1点出土しているものの、その他のものは整形の際にくぼんだもので、上げ底を意識して作られたものではない。

上げ底状の整形は弥生時代中期頃の土器には多く見られるが、次第になくなっていくのが一般的である。上流域では、他の地域よりも長く上げ底状の整形をするという技法が残っていたものと思われる。

3点目の口縁部の拡張の有無について、いわゆる山陰系土器は従来的場式（試案では2期）といわれてきた土器の時期に口縁部が大きく拡張するといわれてきた。しかし、それはどの地域にも共通していえることなのであろうか。口縁部の幅は口径に比例して大きくなる可能性もあるので、口縁部と口径の両方を測定し、口縁部幅が口径に左右されないことを確認したうえで、時期別に平均値を出して、

3つの地域を同じ条件で比較した。（第2表）

これをみると、口縁部の幅は従来的場式と呼ばれている時期に拡張するとされ、編年の目安の1つとされてきたが、実際には各地域によって変化の仕方がまちまちであることがわかる。松江では、従来の編年の際にいわれていたように、2－1期に拡張の度合いは最高値に至り、それ以後は徐々に縮小し、次第に落ち着く傾向を見せている。




| | I | II-1 | II-2 | III | IV | V | VI |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 上流域 — | 2.43 | 2.98 | 3.41 | 3.58 | 3.36 | 3.3 | 3.0 |
| 下流 — | 2.45 | 2.86 | 3.01 | 2.98 | 3.27 | 3.43 | 3.43 |
| 松江 --- | 2.08 | 3.62 | 3.24 | 3.45 | 2.98 | 3.2 | 3.41 |

第2表　口縁部の拡張グラフ

しかし、斐伊川上流域と下流域にはともに大きな変化は見られない。上流域は2－1期、2－2期に拡張傾向を示し、3期に最高値に至る。一方下流域はわずかずつ拡張傾向を示すものの、ほぼ横這いで、3期から5期にかけてやや拡張し、4期から5期の間で上流域と逆転する。しかし、3期以降は各地域での画一化が進んだために、下流域の口縁部が拡張し、上流域のものが縮小したという見方もできるであろう。

このように、口縁部の拡張についても各地域で全く異なる傾向を示している。

第4点は口縁下端部とそこから頸部にかけての形態の違いである。口縁下端部の形態を第3表に示すように区分する。斐伊川下流域（出雲）では、1期は単純型、2－1，2－2期は下延型がみられる。この点に関しては松江も同じ様な変化をみせている。

一方斐伊川上流域では下延型のものは少なく、どちらかというと単純型をそのまま引き継いでいるものや、下端部が垂直方向にわずかに突出しているものが主で、下流域のような下延型といえるものはごくわずかである。

中には芝原遺跡出土土器（第3図11）のように水平方向に突出し、そこから頸部にかけてふくらむ（第3表、側隆B型）という形態のものも少なくない。これは3期以降のものに見られる側隆C型のような鋭さはないため、上流域のものが他地域に先駆けて変化を遂げたというよりは、独自に変化したものと思われる。

以上4点が各地域にみられる相違点である。このほか、頸部内面及び口縁部内面形状についても相違点がみられる。下流域・上流域については、2－1期～3期頃にかけて、口縁部内面の屈曲が大きく、そのため頸部内面の突出が大きく受け口のような形をしているものがみられる。これに比べ、松

江のものはそれほど口縁部内面の屈曲が大きくないため、口縁部から頸部にかけての内面の凹凸が少ないように見受けられる。しかし、屈曲の程度については数値として測定しておらず、また、量的なものについても数えたわけではないので、あくまでも現段階では比較的そういう傾向にあるのではないかという問題提起にとどまっている。

また、従来山間部の土器の特徴といわれてきた器壁の厚さ、胎土の粗さについてであるが、器壁については図面を見比べても明らかなように、両地域にほとんど差はないといってよいであろう。胎土については実見した程度では確実なことは分からないが、上流域の方が粗いなどという印象は受けず、これといった明確な違いは見られなかった。この２点については地域間に見られる相違点とは言い難い。

これらの地域間の特徴の消長をまとめ、表にしたものが第３表である。この表をもとに、ここから窺える各地域の地域性を検討する。

## ４．土器にみられる地域性

各地域の当時の地域性について検討する。第３表をみると、まず、１期には３地域ともほぼ同じ特徴をもっており、明確な地域性は確認できない。つまり、いわゆる「山陰系土器」といわれる複合口縁が採用された頃は、どの地域にも同じ情報が伝わっていたといえる。しかし、２－１期に入ると、急激に地域ごとに様々な変化を見せる。

まず、松江（意宇平野）は口縁部の拡張がみられるが、斐伊川上流域、下流域（出雲）にはその傾向はみられない。さらに斐伊川上流域では口縁部外面に波状文が施されるという、他の地域にはない特徴がみられる。

この波状文については石見地方でも確認されている（羽須美村菅城遺跡、匹見町郷上遺跡など）。また鳥取県でも多く確認されている（倉吉市大山遺跡、東伯郡羽合町南谷大山遺跡など）。ただし鳥取県のものには凹線文と波状文が二重に施文されたものなど（鳥取市大桝遺跡）斐伊川上流域と異なった点があり、波状文が多く採用されているがらといって、同じ地域性をもっているとはいえない。

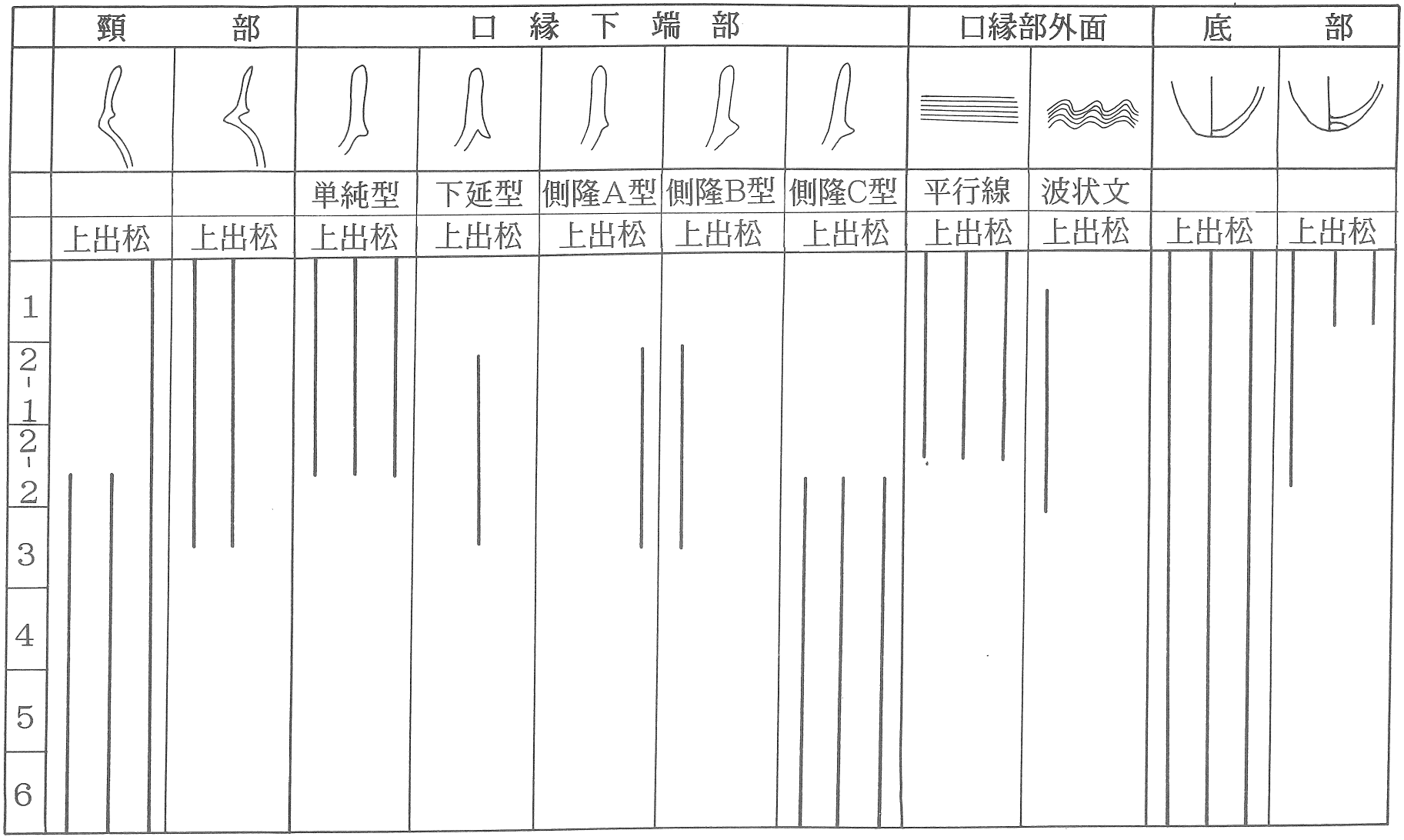
出雲市内では下古志遺跡で口縁部に波状文が施文された壺と思われる口縁部が出土しているが、（第３図17）これは倉吉市周辺でみられるもので（中川寧氏の御教示による）、鳥取県の情報が出雲にも伝わっている証拠であるが、甕の口縁部に施文されているものは出土していない。

このように、情報が伝わっているにもかかわらず斐伊川下流域（出雲）で波状文がみられないというのは、「波状文を受け入れない」という１つの地域性であるとも考えられよう。

また、斐伊川上流域での口縁部の拡張は２－２期から３期にみられること、底部の上げ底が他の地域より遅くまで残っていることからは、他の２地域が受けている影響を少し遅れて受ける、という可能性があると思われる。

この点については出土数が少ないが、上流域の日焼田遺跡、須坂３号墳出土の鼓形器台をみると、２－２期の特徴であるナデ消しがあったり３期以降の特徴がみられたりするものでも筒部が細いなど、古い様相をもっている。これは他の地域の影響を遅れて受ける、もしくは古い様相をそのまま引き継

第３表　各地域の特徴　消長表




上…上流域　　出…出雲（下流域）　　松…松江

ぐ傾向がみられるということがいえるであろう。

一方、斐伊川下流域（出雲）については、２－１期、２－２期に口縁部の拡張がみられないとはいえ全体的な形は松江と大きな相違点はみられない。しかし頸部内面の鋭い稜や２－１期にみられる口縁部の大きな屈曲と頸部内面が受け口状の形を保ち続けることは、１つの地域性の現れといってよいであろう。

全体を通してみると、１期は３地域ともに同じ情報に基づき複合口縁の土器が作られている。しかし、２－１期になると、松江では口縁部の拡張、斐伊川下流域（出雲）では口縁部内面の大きな屈曲と受け口状の形態、斐伊川上流域では波状文の多用と急激に地域性の出現がみられる。

３期以降については、斐伊川上流域で口縁部の拡張幅が最大値に至る、という相違点があるものの、形、文様の面からみると３地域とも大きな違いはなく、この時期以降口縁部の幅についても均一になる傾向があることから、全体的に画一化が図られそれまで発揮されていた地域性が払拭される。
この点については、確実な裏付けをとることはできないが、少なくともこの３地域においてそれまでの地域性が奪われる、もしくは廃棄され画一化されるような文化的、もしくは政治的に大きな動きがあったと考えられる。

３期以降は古墳時代への過渡期であり、今回は敢えて墳墓の資料を取り入れなかったが、今後これらの地域性を把握した上で墳墓の資料の検討を行えば、この時期の３地域及び出雲地方の動きが解明できるきっかけとなるものと思われる。

## おわりに

今回は出雲市出土の遺物を中心に地域ごとの比較検討を行うのみで、狭い地域の地域性の存在を確認することで終わってしまった。また、斐伊川上流域の遺物は器種が限られており、全体像がつかめる状態とは言い難く、甕の変化でしか地域性を摑むことが出来なかったことを残念に思う。しかし、地域性の存在を明らかにしたことで、今後その地域性がどういう影響のもとに生まれたものなのかという部分に行きつければ幸いである。

斐伊川中流域にあたる木次町、三刀屋町などでも調査を行ったが、今回取り上げた時期の遺物はほとんど無く比較することができなかった。上・下流域で出土しているので全くないとは考えにくいため、中間地点の地域性の状態を比較するためにも今後の遺物の増加が待たれる。

## 参考文献


- 弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編　1992.5　正岡睦夫、松本岩雄編
- 「山陰＜鍵尾式＞の再検討とその併行関係」　1979　藤田憲司『考古学雑誌』第６４巻第４号
- 「山陰地域における古墳形成期の様相」　1984　房宗寿雄『島根考古学会誌』第１集
- 「山陰古式土師器の形式学的研究－島根県内の資料を中心として－」　1987　花谷めぐむ『島根考古学会誌』第４集


## 遺物実測図転載報告書


- 下大仙子遺跡　－発掘調査報告書－　1985.3　横田町教育委員会
- 角田遺跡、又下遺跡、付大東高校グラウンド遺跡他資料　1997.3　大東町教育委員会
- 須坂遺跡他　1997.3　仁多町教育委員会
- 天神遺跡第７次発掘調査報告書　1997.3　出雲市教育委員会
- 山持川川岸遺跡　1996.3　出雲市教育委員会
- 神原地区遺跡分布調査報告書　1988.3　加茂町教育委員会
- 沢田宅裏遺跡、鑓免大池遺跡、渋谷遺跡調査報告　1982　横田町教育委員会
- 日ヤケたたら跡、芝原遺跡　1994.3　仁多町教育委員会
- 角森遺跡発掘調査報告書　1994.3　松江市教育委員会
- タテチョウ遺跡　1985.3　松江市教育委員会
- 朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書　2　1987.3　島根県教育委員会
- 朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書　3　1990.3　島根県教育委員会

| 番号 | 遺跡名 | 番号 | 遺跡名 |
|---|---|---|---|
| 1 | 出雲大社境内遺跡 | 26 | 神門寺境内廃寺 |
| 2 | 原山遺跡 | 27 | 上塩冶横穴墓群 |
| 3 | 菱根遺跡 | 28 | 上塩冶築山古墳 |
| 4 | 石臼古墳 | 29 | 築山遺跡 |
| 5 | 山持川川岸遺跡 | 30 | 大井谷城跡 |
| 6 | 鳶ケ巣城跡 | 31 | 地蔵山古墳 |
| 7 | 大寺古墳 | 32 | 半分城跡 |
| 8 | 平林寺山古墳群 | 33 | 半分古墳 |
| 9 | 膳棚山古墳群 | 34 | 三田谷遺跡 |
| 10 | 荻杼古墓 | 35 | 小坂古墳 |
| 11 | 大塚古墳 | 36 | 刈山古墳群 |
| 12 | 矢野遺跡 | 37 | 山地古墳 |
| 13 | 小山遺跡 | 38 | 知井宮多聞院遺跡 |
| 14 | 姫原西遺跡 | 39 | 福知寺横穴墓群 |
| 15 | 蔵小路西遺跡 | 40 | 小浜山横穴墓群 |
| 16 | 白枝荒神遺跡 | 41 | 下古志遺跡 |
| 17 | 斐伊川鉄橋遺跡 | 42 | 古志本郷遺跡 |
| 18 | 上長浜貝塚 | 43 | 大梶古墳 |
| 19 | 天神遺跡 | 44 | 田畑遺跡 |
| 20 | 塚山古墳 | 45 | 宝塚古墳 |
| 21 | 今市大念寺古墳 | 46 | 妙蓮寺山古墳 |
| 22 | 平家丸城跡 | 47 | 放れ山古墳 |
| 23 | 西谷墳墓群 | 48 | 浄土寺山城跡 |
| 24 | 角田遺跡 | 49 | 地蔵堂横穴墓群 |
| 25 | 下沢古墳？ | 50 | 栗栖城跡 |

付図　出雲平野の遺跡

平成11年(1999) 3 月 8 日　印刷
平成11年(1999) 3 月12日　発行

# 出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

## 第 9 集

発行　出 雲 市 教 育 委 員 会
印刷　㈲ ナ ガ サ コ 印 刷